

## 芸術による地域創造～日本における芸術存在価値～

大阪芸術大学 舞台芸術学科 特任講師 河邊こずえ

本研究はまず近年著しく減少している、日本における芸術関係者の活躍の場について考えることから始まる。また調査を進める中で切り離せない関係となってくる、日本の地方過疎化。これら二つの問題点に重きを置き、これからの日本の文化のあり方を見直す時に来ていると見据え調査を行なってきた。今年度は用もしていなかったコロナウィルス大流行により、元々厳しい状況であった芸術の就職はさらに最悪の状況を迎えている。しかしこういった状況においてこそ、これまでの芸術、本研究においては舞台芸術のあり方を変えるチャンスでもある。特に今年度、現地調査を行う中で芸術のあり方の変化を考察することが出来、これからの舞台のあり方を見いだす大きな橋がかりとたつた。

2020年春頃より猛威を振るい始めたコロナウィルスは人々が場所に集うことを、ことごとく制限していた。ライブハウス、劇場はクラスターの起こりやすい場所と取り上げられ、未だに観客全員動員は厳しい状況が続いている。元々懸念されていた日本人の劇場離れはさらに加速する最悪の事態となった。また日本において元々活躍の場の少なかった舞台演者や裏方スタッフもことごとく仕事が消えていった。舞台劇場に関わる人々は実践して舞台に立って報酬が発生する。公演そのものがない中、収入を確保することは非常に厳しい状況となった。大手オリエンタルランドの雇用解雇なども話題になった。大手に就職できた者も職を失った。そしてもちろん様々な企業が新規オーディションを中止、現在抱えている団員にもお給料が払えない中、新規メンバーを迎えることができない。これまでも就職率の良くなかった舞台界は、まだ海外にて職を見つけることが希望の光であったが、海外への道も絶たれてしまった。勿論舞台業界以外も大変な状況であるが、今こそ日本国内において芸術作家、表現者の活躍の場を増やす時なのだと確信している。

コロナ渦において美術館も閉館や人数制限などを余儀なくされていた。調査中、一番多かったのは完全時間予約制による対応。そして他にも美術館によって様々な取り組みも見られた。

六本木森美術館においては、エンブティ企画をしており、閉館した美術館に発信力あるアーティストを招待し、SNSなどに拡散し人々の興味を引く試みを行っていた。筆者も招待を受け閉館後の美術館に入らせていただいた。普段美術館は様々な人が好きな時間に入りし、人がいてもこの世界に没頭するイメージであったが、閉館後誰もいない美術館にて展示中の作品と筆者自身はその空間を舞踊にて表現し、写真作家と

ともに写真作品として、新しい形で美術館のPRを行うことに成功した。招待を受けて個人的感想にて口コミPRするのではなく、自身の表現を駆使してPRをすることは非常に周りの人々にとっても新鮮で興味を惹いた。近年SNSのように自らをブランディングできるツールが増えたことにより、このような、他ジャンルとの共同制作が可能となった。美術館側からしても事務所などを通さずSNSにおいて個人アーティストと関わるのが可能となる。このような働き方や表現する場はコロナ渦によって一気に加速した。これからの一つのツールとして作家や表現者は大いに駆使して行くことで、仕事の幅を広げていける可能性があるかと確信している。

そして今年度著しく発達したリモート環境は、私たちの生活環境にも大きく影響を与えた。会議もほとんどリモートになった。始めは誰もが抵抗のあったリモート、しかしコロナウィルスの影響を受け自宅にいる時間の長くなった今、もはや生活の一部になりつつある。

筆者もこれませ避けてきた舞台のオンライン配信を行なった。避けていた理由は、舞台は生で観ることが一番素晴らしいので価値を下げたくなかった。また簡単に観られることでさらに人々は劇場離れするのではないかと。という心配からであった。しかし、公演の中止、延期を繰り返し、何か形に残したい。今年度の作品を観客に届けたい。その一心でオンライン公演に取り組んだ。映像にこだわり、何カットも撮影したものを編集し、大掛かりなチームで挑み、映像作品として舞台を創り上げた。その頃すでに人々はオンラインにて公演やライブを観ることに慣れており、沢山の人が配信を観覧してくださった。このような状況でなければ筆者もオンライン公演はしていなかったので感慨深かった。これまで大きな問題として日本人はチケットを買って劇場に行かない。その大きな問題であった、時間や場所の拘束から解放され、人々はより気軽に舞台を観劇してくれたことに新しい発見があった。

今年度調査し、経験したことを振り返り、この状況をチャンスとして芸術の新しいあり方を見いだすことができた。勿論この先地域再生とともに劇場や日本における芸術表現の場を展開して行くにあたって、作家や表現者はまず自己プロデュース力、様々な場に対応して行く演出力を身につけること。そしてその先を見据えた企画を打ち出して行くべきなのだと確信している。